

## 講義理解能力の育成を目指して

### —実証的研究による理論を取り入れた教育実践の取り組み—

毛利 貴美

#### 要 旨

留学生が大学・大学院への進学後に求められるアカデミック・リテラシーの一つに講義理解がある。筆者は、この講義理解を早稲田大学大学院における中心的テーマとしてこれまで研究を行ってきた。その実証的研究を経て「アカデミック・インターアクション・スキーマ」の獲得がアカデミック・リスニング能力の育成に繋がるという理論が構築され、現在は、教育実践に応用する段階にある。授業では、様々なストラテジー・トレーニング、ピア・リスニングなどの学習者同士の協働的学習、ならびに学習者の自律的学習の促進のためeポートフォリオによる振り返り活動を取り入れ、メタ認知的能力の向上を目指している。今後は、学習者からのフィードバックを得て、活動を体系的にまとめ、アカデミック・リスニング能力向上に特化した教材の作成を目標としたい。

#### キーワード

講義理解 アカデミック・リスニング ストラテジー・トレーニング ピア・リスニング

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景

筆者は、早稲田大学大学院日本語教育研究科に2002年に入学して以降、2011年に博士課程を修了するまでの期間、「講義理解」を研究の中心として据えてきた。この研究の動機となったのは、大学に進学した学習者から「日本の大学の講義が聞き取れない」「先生がずっと早口で話して、黒板にあまり文字も書かないから理解しにくい」という声を耳にする機会が多く、大学院で専門的に研究し、実践に役立てたいと考えたからであった。

大学の講義に関する研究は、1980年代以降の留学生の増加に伴い、現在まで数多く報告されているが、留学生の「聴解力」を促進させるための指導法、もしくは講義の談話の特徴に焦点を当てた研究が主流となっていた。1990年代後半以降、日本語学習者である留学生を対象とした研究も、ノートテイキングや上級レベルの聴解能力育成に焦点を当てた量的研究が多く、講義場面における学習者の問題分析に基づいた研究はほとんどなかった。

### 1.2 教育実践の基盤となった実践的研究

前述のような背景から、筆者は、修士論文(麻生2002)の研究では再生刺激法を用いた質的研究を行った。この研究では、講義を受講中の留学生の視野をCCDカメラによって

録画した後、その録画データを視聴しながら講義中の行動と意識についてインタビューを行い、データを分析した。その結果、講義理解の過程で問題が起こった際には、8割以上が講義中に理解に到達できず、また、聴解のミクロな聞き取りから、「辞書を引く」「友達に訊く」などのマクロな調整ストラテジーに至るまでの連鎖があり、そのストラテジーも約30種類確認されるなど、様々なストラテジーを駆使して聞き取る複雑な過程があることが示された。博士後期課程に進学後は、日本人大学院生と留学生を対象に講義ビデオを視聴する際の視線行動をアイカメラによって記録した後、再生刺激法によるインタビュー調査を行い、データを収集した。しかし、同様の方法論を用いた先行研究がなく、理論的な枠組みや分析の方法を決めかねていた際に、2008年から2年間、アメリカの Albion College というリベラル・アーツの大学に赴任し、大学の教育方針や理念、大学教員や学習者の学びに対する意識の高さに触れる機会があった。この経験は研究にも影響し、講義理解には双方のインターアクションが関係するという視点から、西田(2000)の異文化間コミュニケーションにおけるスキーマ理論、ならびにネウストプニー(2003)のアカデミック・インターアクションの理論を援用し、データの分析を行った。その結果、講義理解には、表1のような「講義理解のためのアカデミック・インターアクション・スキーマ」(毛利2011、2014)が求められるという結論に至った。

表1 講義理解のためのアカデミック・インターアクション・スキーマ (毛利2011、2014)

文法行動に関わるスキーマ (言語スキーマ)
<p>【アカデミック・ジャパニーズに関わる言語知識と能力】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 上級日本語レベルの語彙</li> <li>・ 上級レベルの4技能(読解/聴解/発話/文章産出)の知識と能力</li> <li>・ 専門分野に関する語彙</li> <li>・ アカデミック領域における構文・接続表現など談話の知識</li> <li>・ 統語論、形態論、語彙論、音韻論、表記論の知識と能力、ストラテジーによるプロセス</li> </ul>
文法外コミュニケーション行動に関わるスキーマ (対人コミュニケーション・スキーマ)
<p>【講義理解過程における情報の伝達に関わる知識と能力】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 事実/概念スキーマ (専門的知識も含めた概念に関する広範な知識)</li> <li>・ 人スキーマ (講義の参加者の情報を含めた広範な知識)</li> <li>・ 自己スキーマ (アカデミックな領域も含めた自伝的記憶)</li> <li>・ 役割スキーマ (講義の参加者の役割に関わる知識)</li> <li>・ 状況スキーマ (講義の場面を把握し、調整行動を行うための知識)</li> <li>・ 手続きスキーマ (講義理解を達成するための行動ルール: 講義の流れや展開に関する知識)</li> <li>・ 方略スキーマ (言語、非言語情報による予測を含めた講義理解のストラテジー・講義の問題解決のストラテジー)</li> <li>・ 情動スキーマ (講義の内容に対する主観的/客観的評価と感情のコントロール)</li> </ul>
社会文化行動に関わるスキーマ (文化スキーマ)
<p>【講義参加者とのコミュニケーションを繰り返すうちに形成される、講義におけるコミュニケーション行動の体系組織および人間関係に関わるスキーマ: 大学や教室を一つの文化とする参加者の行動様式】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 講義の参加者としての意識と知識</li> <li>・ よりよい学びの場としての講義場面構築を目指した意識と知識</li> <li>・ 学習に対する共同的、協働的、支援的な意識に関する知識</li> </ul>

## 2. 関西大学留学生別科における教育実践

### 2.1 新設された予備教育過程でのアカデミック・リテラシー養成の取り組み

博士後期課程を修了後は、2011年9月に関西大学国際教育センターの特任常勤講師（プログラム・コーディネーター）として着任し、2012年4月に設立予定であった留学生別科の全体的な教育カリキュラムならびにプログラム作りに取り組んだ。

本別科の特徴としては、大学・大学院等での学術活動の基礎となる日本語能力に加え、高度な論理的・分析的・批判的思考力と語学運用能力を養うカリキュラムの提供を目的とし、「アカデミック・ジャパニーズ」強化クラスを設置していた点、そして、海外の学習環境からのスムーズな教育の移行を目的とし、入学前からLMS（Learning Management System）を用いた教育を行っていた点が挙げられる。つまりは、入学前から日本語教育をより大きな枠組みとして捉え、在学中、進学後を連続したサイクルとし（図1参照）、教育のアーティキュレーション<sup>1</sup>を意識したプログラムの実践が理念となっていた。

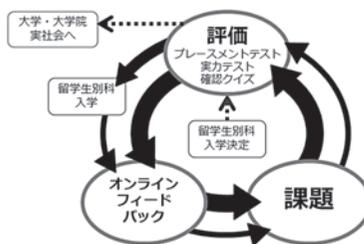


図1 関西大学留学生別科の試み

### 2.2 アカデミック・リスニング能力の育成に向けた教育実践

この留学生別科で筆者が担当していたクラスの一つは大学・大学院進学者のための「アカデミック日本語リスニング」のクラスであった。教育の目的は、大学・大学院入学後にスムーズに学習や研究がスタートでき、言語レベルを超えた専門レベルの学びが可能となること、そして、入学前に学習者自身の講義理解の問題を認識させ、問題が早期に解決できるようなストラテジー・トレーニングとその必要性の意識化を行うことであった。授業では、表1の「講義理解のアカデミック・インターアクション・スキーマ」の獲得を目指した授業計画を作成し、実践を行っていた（表2参照）。

表2 アカデミック・リスニング能力育成のため授業計画

	授業の内容		授業の内容
第1回	背景知識の活性化	第9回	問題解決の方法
第2回	テーマやキーワードの確認	第10回	推測・予測のストラテジー
第3回	構造マーカー：接続表現の種類と機能	第11回	聴読解の技法／文字情報の統合
第4回	フィルターの種類と機能	第12回	ノートの再編成・要約・整理
第5回	提題表現と叙述表現、繰り返しの表現	第13回	リアクションペーパーの作成
第6回	非言語（ジェスチャーや音）による理解	第14回	関西大学の講義を聴講（実践）
第7回	ノートテイキングの手法	第15回	第14回の聴講内容の発表
第8回	講義の聞き取り：Critical listening		

### 2.2.1 使用教材

実際の講義では、聴解能力だけでなく、読解やノートテイキングの文章作成能力、そして、講義担当者の非言語などを理解に生かす、インターアクション能力が求められる。よって、教材は、日本留学試験のような聴解能力向上を目的とした聴解教材ではなく、全国の大学のOCW (Open Course Ware) で公開されている講義ビデオを採用し、できるだけ通常の講義と近い形での聞き取りやノートテイキングが可能となる学習環境づくりを目指した。

### 2.2.2 授業の流れ

授業では、まず、表2のストラテジーの機能について説明と簡単なタスクを行い、同時に毛利(2011, 2014)の研究結果ならびに留学生の講義理解の困難点を紹介する。例えば、第3回の「構造マーカー: 接続表現の種類と機能」の回では、まず、構造マーカーの機能の説明に加え、研究対象であった留学生からのコメントを通して構造マーカーを聞き取るスキルの重要性を意識させ、学習動機を高めておく。次に、メタ言語、接続詞を特に多く用いる講義担当者の講義ビデオを視聴し、ノートテイキングを行う。授業の最後にはスクリプトを配付し、テキストの中の構造マーカーを確認する、という流れとなっていた。

### 2.2.3 ピア・リスニングによる協働学習

次に、学習者は講義の内容を書き留めた自分のノートをもとに、メモリー・ツリーの作成を行う。これは、逐次的な聞き取りだけでなく、全体の内容と講義談話の構造を理解するメタ認知的な聞き取り能力の習得を目指したものである。学習者は自分の書いたメモリー・ツリーを持ち寄り、クラスメイトと相談しながら、黒板に協働で新たなメモリー・ツリー(図2)を完成させる。これは、ピア・リスニングの要素を取り入れたもので、お互いの理解を補完し合う協働学習ともなり、毛利(2015)では、活動の過程で様々な気づきがあったことがわかっている。

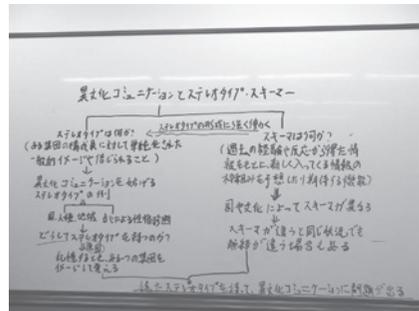


図2 メモリーツリーの作成

### 2.2.4 LMS (Learning Management System) の利用による振り返り

授業後には、LMSの一つであるeポートフォリオ(manaba-folio:朝日ネット)を利用し、自分自身の聞き取りを振り返る活動を取り入れた。eポートフォリオにコメント欄を設け、「講義の理解度」「理解の困難点」「問題が起こったときのストラテジー」「今後の目標」を書き込むことで、自己の聞き取りの特徴に気づき、客観的に捉えるメタ認知的な能力、ならびに、自分自身で講義理解の問題を解決できる自律的な方略の習得を目指した。

### 2.2.5 聴講による講義理解の実践

全てのストラテジー・トレーニングを終えた後に、実際に本科である関西大学の講義を聴講するという講義理解の実践を行った。講義を受講後は、その講義内容や特徴、聞き取りの困難点などについて最終週で発表を行ったが、学習者からは「(講義を90分聞くのは)すごく集中力が必要だった」「講義のゲストスピーカーの言っていることが(早口で)わからなかった」等のコメントがあり(毛利2015)、実際の大学の講義を聴講することで、自己の聞き取りの問題を改めて認識し、聴解能力だけでなく、より広範囲なアカデミック・

インターアクション能力の必要性に気づく機会となっていたことがわかっている。

### 3. おわりに

以上のように、2002年に筆者が日本語教育研究科に入学してからこれまで取り組んできた講義理解の研究は、修士課程ならびに博士後期課程における実践的研究を経て理論が構築され、現在は、その理論をアカデミック・リスニング能力の養成を目指した教育実践に応用する段階にある。2015年4月からは、母校である早稲田大学の日本語教育研究センターに着任し、テーマ別科目の「アカデミック・リスニングの方略」の授業を担当し、現在は学習者からのフィードバックを得て、実践方法の改善を重ねているところである。今後は、ストラテジー・トレーニングのための効果的な教材の作成が課題となっており、当面の目標となっている。

講義理解の研究を始めてから早くも14年の月日が流れようとしているが、このようなライフワークとなる研究に出会えたことに心から感謝している。

### 注

- 1 アーティキュレーションとは、習得目標達成のためのカリキュラム、インストラクション、評価の異なるレベル間の連続性、連携、同じプログラム内のクラスの連続性、一貫性を指す。宮崎(2013)は、留学前プロセスにおける出発前、留学中、帰国後のプログラムの整合性や連続性に関する課題を指摘し、国際間の移動や異なる専門領域間におけるアーティキュレーションの意識化を提唱している。

### 参考文献

- 麻生貴美(2004)『大学の講義場面における留学生の聴解過程および問題処理ストラテジー』早稲田大学大学院日本語教育研究科 修士論文
- ネウストブニー、J.V.(2003)「アカデミック・インターアクションの理解にむけて」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ: 日本留学試験が日本語教育に及ぼす影響に関する調査・研究—国内外の大学入学前日本語予備教育と大学日本語教育の連携のもとに—』平成14年度・16年度科学研究費補助金(基盤研究費(A)(1))研究成果中間報告書 pp.139-150
- 宮崎里司(2013)「グローバルレベルと市民レベルで協働実践する行為主体者(アクター)から捉える新たなアーティキュレーションの提唱」『早稲田大学大学院教職研究科紀要』第5号、pp.29-45
- 毛利貴美(2011)『講義理解におけるアカデミック・インターアクションに関する実証的研究』早稲田大学大学院日本語教育研究科 博士論文
- 毛利貴美(2014)『講義理解におけるアカデミック・インターアクションに関する実証的研究』コ出版
- 毛利貴美(2015) カイト由利子(監修)古川智樹(編者)「第3節: アカデミック・リスニング能力の養成」『留学生教育の新潮流—関西大学留学生別科の実践と研究』関西大学出版部 pp.115-139
- 西田ひろ子(2000)『人間の行動原理に基づいた異文化間コミュニケーション』創元社

(もうり たかみ 早稲田大学日本語教育研究センター)